

# 力石咲 ステイトメント

## 世界を編み包む

～今ここを編集する作業～

一本が周囲を巻き込み広がって、面となる。それは一本であることに変わりはない。重力と時の流れに抵抗して一本の末端をその場に保とうとすれば、面は逆に重力に身を委ねてほろほろと解けていく。時間が流れてまた一本に戻っていく。そんな景色が今私の頭の中を繰り返し流れている。

糸を編んで初めて美術作品を作ったのは2003年だった。卒業制作に入る直前の大学3年の冬。友人から帽子の編み方を教わる。その手法で抱きつけるほどの大きさの地球儀を編んだ。でも編み物は、もっと以前の小学生の頃に、今は亡き母から教わっていた。それよりもっともっと以前の縄文時代から、人間は編み物をしていた。地球儀を編んで20年弱。その時から意識的に、プリミティブに、自分の身体と糸でものや人や環境に関与してきた。でも編むことは、DNAに組み込まれていたのかもしれない。そして自分自身がニット化していることにも気づいた。巻き込んで広げるし、環境に広げられもする。そのたびにその時そこだけの形を形成してまた自分に戻る。けれど一期一会の痕跡は記憶や思考やあるいは外見に残っていて、丈夫になったり柔軟になったりほつれたりした自分で今を生きている。そんな自分で次はどんな面を編もうか。

私は、今ここに生きる人に対して、今ここにいる自分で、今ここを編集し、提示したい。

～なぜ「編み」なのか～

「編み」は「今」と「ここ」を感知させる。

- ・一本の糸を編むという行為は、時間の経過であり空間への関与である
- ・編んで解ける性質は、変化、無常、儚さ、再生、輪廻である
- ・「編み」は太古からある技術で世界中で独自の発展を遂げているということに、時空を超えたものを感じ、土着性を感じ、最先端の技術とのハイブリッドに可能性を感じている
- ・形状維持が難しい性質は、柔らかさ、身体性、エージング、生と死、環境を意識させる
- ・紐状のものであればどんな素材も編むことができるということは、特定の時と場所を選ばないけれども特定の時と場所を表現することができる

力石咲